

# 石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成 25 年 1 月 31 日発行 第 19 号

## 福島県民、心からの声

昨年の 12 月の頭の 12 月 1 日から 3 日までの三日間、筆者（末永）は一人旅で福島県の喜多方と飯坂温泉を訪れていました。目的は、テレビ報道のインタビューのような緊張した姿ではなく、リラックスしている状態での福島県民の本音を聞くためです。動機としては、旅をしたかったからという理由もありますが、ゼミを通して調査している内に純粋に気になったから、報道からの意見だけを見るのは良くないと考えていたから、です。

初日の 12 月 1 日は喜多方へ向かいました。その日の天候はあいにくの雪だったので、人通りも少なく外を回るのは困難でした。そのため、旅館のチェックインが可能になる時間まで、近場のカフェで時間をつぶすことにしました。カフェならば現地の人が居る可能性が高いと考えたからです。その予想は的中し、5 歳の男の子と小学 6 年生の女の子、そして優しい母親が談笑していました（年齢は話して判明）。

カウンター席に腰掛けてコーヒーをすする私に、男の子がイタズラをしてきたことがきっかけで、その家族の母親と落ち着いた雰囲気のあるマスターから話を聞くことができました。二人の話によると、現在の喜多方市は地震そのものの爪跡より、原発による風評被害のほうが深刻なようでした。福島第一原子力発電所から約 100 キロ離れているにも関わらず、放射能を気にする人が増えたためか、街を訪れる観光客と思わしき人々を目にしなくなったそうです。

気持ちの抵抗はありましたが放射能について尋ねたところ、母親の方は気にせず前向きに考えていました。しかしマスターは、カフェで使用している温泉水についてお客さんがどう思っているかを気にしていました。この意見は職業柄のものですが、思ってもいなかった所への影響なので、マスターの声が頭に響きました。その後、暗い話を子どもの前で続けるのは気が引けたので話題を変え、夕方に私と家族と一緒に店を後にしました。

二日目は飯坂温泉に向かいました。



心が安らぐマスターこだわりの絶品コーヒー



この日の夜、私は旅館の若旦那に薦められたバーに行きました。そのバーには、ニット帽を被ったエネルギッシュな感じの若々しい男性と、30 代くらいの短髪で落ち着いた雰囲気の男性という先客が二人、マスターの前のカウンター席に腰掛けていたので、私は彼らから二つほど席を空けて座りました。

彼らの話に耳をそばだてると、商工会の CM 制作について聞こえてきました。この話に興味を持った私は、タイミングを見て話しかけて会話に参加することが出来ました。

話をしているうちに若々しい男性が農業に携わっているということが分かったので、東日本大震災以降の影響について尋ねました。仕事の農業に関しては、周囲から「農業復旧・復興のための義援金を貰うことができ、楽になっていいな」というようなことを言われたそうです。しかし、実際は放射能による風評被害のせいで売れ行きが芳しくなく、マイナスがゼロになっただけで楽ではないという現状なので、周囲から誤解されていることを嘆いていました。

また、引っ越し住民が出てくるのは仕方の無いことだが、引っ越し際に周囲に「あなた達も早くどこかへ移ったほうが良い」というようなことを口にする人に対して憤慨していました。なぜ事態を理解して残っているのに、不安を煽るようなことを言い去るのか。それでは喫煙者に対し「健康を害すぞ」と言うのと同じ様なものではないか、と語っていたのが印象的でした。

震災時にバーは大丈夫だったのかとマスターに尋ねたところ、飯坂温泉ではほとんど揺れることが無かった場所もあったらしく、このバーの瓶は一本も割れるどころか倒れなかったそうです。このような話は、直接でなくてはなかなか聞けないので、来た甲斐がありました。

落ち着いた雰囲気の男性からは、放射能に対し過敏でない私に飯坂温泉の名物であるラジウム卵をご馳走してくれました。月並みの表現ではありますが、口の中できちんととろけるような美味しさでした。先入観で食べない人にも食べてもらいな、とも思いました。

今回の旅を通し様々な人に出会い、直接話を聞くことが出来ました。そして、多くの人は苦しい状況に置かれても呆然と諦めているのではなく、前向きに考え努力しています。そのような人々に対し、私達が彼らを知ろうとする努力をせずにただ拒絶的態度をとるのは失礼だと思います。そのような考えに心当たりがある方には、その認識を少しでも改めてもらえれば幸いです。

（末永 寛二）

## 畠山重篤氏が語る三陸海岸の価値

2012年11月30日の金曜日、日本観光研究学会と（社）石巻観光協会の主催のもと、復興交流フォーラム in 石巻「地域の再生と観光のちから」が、道の駅「上品の里」レストラン「栞」にて開催されました。

基調講演は「森と海のはざまの旅」というタイトルで、震災後の様子から、三陸海岸の価値にいたるまでを限られた時間のなかで述べていただきました。

震災後、先生ご自身が一番心配なさったのは海辺に生き物の気配が、全くしなくなったことでした。小さいカニやフナムシの気配すら感じられないことにより、チリ地震沖津波の約10倍という今回の津波の被害があまりに甚大であると悟られたようです。

京都大学フィールド科学教育センター社会連携教授である畠山氏は、学問の世界を縦割り行政の様子に似ている点があるため、十年前に京都大学にて森里海関連学という、森や海の関連性についてすべてを学ぶ学問を立ち上げました。

その学問の視点に立ち、2011年に森林学や海洋学など様々な教授たちが集まり、千年に一度の大津波で津波を受けた場所の流域の自然はどのように変遷していくかという調査をするグループを結成することになりました。調査の結果、プランクトンの量が豊富にあることが判明し、調査隊の先生方曰く「牡蠣が食べきれないほどのプランクトンが存在する」とのことでした。その理由として陸であったところに流れていた山々や木々からのフルボ酸鉄が鮎川方面に大量にながれこんだことによるもの、とのことでした。

畠山重篤氏は森里海関連学の観点のもと、山や河川から送られてくるフルボ酸鉄とプランクトンの切っても切れない関係性を述べてくださいました。世界三大漁場である三陸沖が豊かな漁場である理由は、中国の揚子江とロシアのアムール川から送られてくる豊富な量のフルボ酸鉄が海洋プランクトンの栄養となりそのプランクトンがカキやホタテなどの栄養になり海の世界連鎖が活発になるからだそうです。さらに、日本は多くの山と3万5千本の河川に恵まれており、日本の各地で海産物がよく取れるのはフルボ酸鉄の供給源となる河川に恵まれているからであると力説していただきました。

石巻の北上川の流域や三陸海岸を観光資源にするなら海だけでなく山や、川も視野に入れた知識を踏まえてから観光資源として売り出していくことが大事なのではないか、と述べておられました。

(小久保敬太)



例年よりも雪の日が多い今年の石巻

## 仮設住宅から復興公営住宅へ

あと一カ月程で東日本大震災から2年になります。しかし、現在も多くの問題が山積んでいます。

復興公営住宅の問題もその中の一つです。復興公営住宅（災害公営住宅）とは、震災により住宅を失い、自力での住宅再建が難しい方のために提供する公的な賃貸住宅です。

今回、石巻市は、湊地区の根上り松に20戸、中里地区の中里7丁目に20戸、2月4日から19日までの期間に復興公営住宅の入居者を募集すると発表しました。募集戸数を上回った場合は、2月27日に抽選会を行います。対象者は、高盛り土道路や河川の堤防施設の事業用地に住み、震災により住宅が半壊以上で、解体しなければならない人です。また、間取りは1~2人用の1LDKが4戸、2~3人用の2LDKが11戸、車いす利用の2~3人用の2LDKが1戸、4人以上用の3LDKが4戸となっています。家賃は、所得によって設定されるということです。

復興公営住宅の入居時期は根上り松が4月1日以降、中里7丁目7月以降になるようです。市は、全体で4,000戸の復興住宅を建設予定で、すべてが完成するのは2015年になる見通しです。

しかし、このように仮設住宅から復興公営住宅への移動を進めることはまだ始まったばかりでしかありません。石巻市長も「津波による全壊家屋が約2万2,000棟と多く、住宅再建に向けてはまだ2合目だ」と言っています。私も、同じことを感じました。震災から2年が経とうとしている今もなお仮設住宅にはたくさんの人が日々暮らしているのです。

私は、最近テレビのニュースで「仮設住宅での生活はすごく快適です」と答えている人を目にしました。しかし、これには問題があると思います。なぜならそれは長期間の仮設住宅生活も可能という印象を与えるからです。復興への新たなスタートが切れた今、そのスピードを加速させることが大事なことでないでしょうか。

(横山風太)

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail [senshu-maruoka@inter7.jp](mailto:senshu-maruoka@inter7.jp)



畠山重篤氏